

[研究論文]

日本の高校生の英語圏交換留学参加決定プロセス

アメリカの場合

The Process by Which Japanese High School Students Decide to Participate in an Exchange Program between English-Speaking-Countries and Japan

Cases When Students Choose the USA

岩本 綾

信州大学全学教育機構非常勤講師 / 慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員

Aya Iwamoto

Part-time Lecturer, School of General Education, Shinshu University / Senior Researcher, Keio Research Institute at SFC

Abstract: 本研究は、日本の高校生がアメリカへの交換留学に参加を決めていくプロセスを明らかにする。アメリカへの高校交換留学経験を持つ大学生 10 人にインタビュー調査を行い、M-GTA で分析した。その結果、《国際的キャリアビジョンからの逆算》と《過去ベースの西洋英語圏志向》という 2 つの動機が、場合によっては《受験優先規範からの解放》の影響も受けて、《アメリカ高校留学の決意》へと進展する、というプロセスが明らかになった。高校留学、特に交換留学を促進するための支援策を探る。

This study describes the process by which Japanese high school students decide to participate in an exchange program to the USA. 10 university students who were exchange students to the USA during high school were interviewed. The data was analyzed with the Modified Grounded Theory Approach. The study found that the two major motivations were «planning backwards from one's international career vision» and «Western English-speaking-country orientation based on one's previous experiences». Furthermore, the study found that these maybe affected by «freedom from the norm that prioritizes entrance exams», and then develop towards the «decision to go to the USA during high school». Support measures promoting exchange programs are discussed.

Keywords: 高校交換留学、西洋英語圏、留学動機、M-GTA
exchange program for high school students, western English-speaking countries, motivation to study abroad, M-GTA

1 はじめに

1.1 問題の背景

平成 27 年度に 3 ヶ月以上留学した高校生の数は 4,197 人で、11 年ぶりに 4,000 人を超えた (文部科学省, 2017)。近年では「短期留学」とも呼ばれる、3 ヶ月未満の「外国への研修旅行」に参加した高校生は同年にのべ 31,645 人 (文部科学省, 2017) である。文部科学省は 2020 年までに高校生の海外留学を 6 万人にすることを目指している^[1] (文部科学省, 2014) が、現在のところ、目標には届いていない。

文部科学省 (2017) の調査で「いつか外国へ留学したい」と答えた高校生は 40% である。しかし、高校在学中にそれを実行しようとする動きは弱い。一ツ橋文芸教育振興会・日本青少年研究所 (2012) の高校生の留学意識に関する調査 (2011 年実施) によれば、「高校在学中に留学したい」と答えたのは、3.4% にすぎない^[2]。留学希望者の多くは大学在学中 (31.8%) を想定している。

高校留学は大きく「交換留学」と「私費留学」に分けられる (表 1)。ここでいう交換留学とは、「1 年間を海外の無償のボランティアの受入家庭に家族の一員として滞在し、その滞在地域で正規の高校と認定されている学校に授業料免除で通学し、現地の同世代の青少年や一般の人とお互いが異なる文化的背景を持つ者として理解しあおうと努力するプログラム」(全国高校生留学・交流団体連絡協議会, 2011) で、学校外の「交流団体」が実施するものであ

表 1 高校留学における交換留学と私費留学の違い
(AFS 日本協会, 2017、筆者一部改変)

交換留学		私費留学
海外で地域生活を体験し、異文化に対する理解を深めること	目的	海外の教育システムで、興味のある分野の知識や技術を伸ばすこと
国の希望を出すことはできる。配属地域や学校・学年、家庭は選べない	留学先の国・地域	選べる
現地の一般家庭にホームステイ (無償)	滞在形態	寮滞在または現地の一般家庭にホームステイ (有償のケースが多い)
1 学年間 (約 10 か月) 出発日・帰国日は交流団体が指定	期間	選べる
プログラム参加費は 120 ~ 160 万円	費用	寮滞在で 450 万円以上、ホームステイで 300 万円以上 (目安)

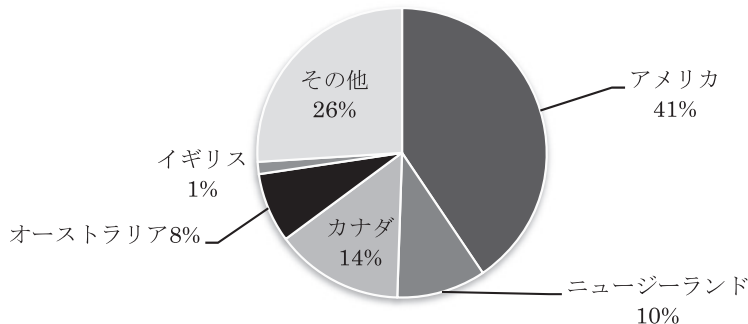


図1 平成27年度における「斡旋団体等」を主催者とする高校留学プログラムの留学先
(文部科学省, 2017より筆者作成)

る^[3]。交換留学生数は集計されていないが、下川(2005)によれば高校留学の6割を占めており、高校留学の典型的な1形態といえる。規模の大きな交流団体は全国組織であり、留学費用が抑えられている点からも、交換留学は私費留学よりもアクセスしやすいと考えられる。そのため、高校留学の一層の促進を図る上で、交換留学の充実は重要な施策といえるだろう。

高校生の留学先として最も多いのはアメリカ(1,245人、文部科学省, 2017)である。平成27年度にアメリカ、ニュージーランド、カナダ、オーストラリア、イギリスの西洋英語圏5カ国へ留学した高校生は3,515人で、全体の84%を占める。同様の傾向は交換留学でも見られる。図1は、平成27年度に「斡旋団体等」を主催者とする3ヶ月以上の高校留学プログラム参加者の留学先を割合で示したもので、交換留学もここに含まれる。交換留学誕生の背景には世界平和という大きな願いが託されていた^[4]ことから、交換留学の留学先は世界中に広がっている。例えば、日本で最も多様な国に高校生を派遣しているAFS日本協会は、2018年に39カ国へ留学生を送り出す予定である(AFS日本協会, 2017)。確かに図1では「その他」も26%いるが、それでもアメリカをはじめとする西洋英語圏に留学する高校生が圧倒的に多いことがわかる。

現在は少数派に留まる高校留学、特に交換留学を促進するためには、どのような方法が考えられるだろうか。まずは、高校交換留学経験者に調査を行い、彼らがどのような理由で、またどのような過程で、交換留学への参加を決意し

ていったのかを明らかにすることが、基本的な知識として必要だろう。特に、「なぜ高校在学中なのか」「なぜ交換留学なのか」という点の解明は、高校交換留学を促進する上で重要である。

1.2 先行研究

高校生がどのような理由・過程で交換留学への参加を決めていくのか、という問いを解くために、留学動機に関する研究を概観する。大学生の留学を中心とする留学動機に関しては、「国家の負担によって、特定の専門領域あるいは職業的な訓練を習得し、それを自国に持ち帰って社会に貢献することを期待される」古典的な第1世代の派遣型留学から、「個人負担で、市場を媒介とした」第2世代の留学形態（金子，2000）へと、「留学の私事化」（小柳，2002）が進んでいることが指摘されている。留学動機が多様になってきたのは第2世代になってからであり、そこから留学動機研究も行われるようになってきた。しかし、高校留学の研究は「総じて乏しい」（法澤，2005）といわれ、動機に関する研究も多くはない。その中で高校交換留学に関しては、AFS日本協会（2002）¹⁵やバクナー（1997）などの研究がある。また、高校生を対象に留学意識を尋ねた調査には、一ツ橋文芸教育振興会・日本青少年研究所（2012）や文部科学省（2017）がある。

多様な国々に高校生を派遣しているAFS日本協会（2002）は、留学先別に留学動機を調査している。交換留学先の決定した高校生317人に対して、留学の目的や留学希望国の選定基準を尋ねた。同団体の高校交換留学では複数の留学希望国を挙げて出願することができるため、対象者を当初の希望別に「英語圏のみ希望」「欧州のみ、および欧州と英語圏を希望」「中南米・アジアも希望」の3グループに分けて検討したという。留学目的を選択肢の中から順位をつけて3つ選ばせたところ、どのグループも「異文化を学ぶ」「国際的視野を身につける」「語学を習得する」が上位3つの目的であった。しかし目的の第1位はグループによって異なり、「英語圏のみ希望」グループが「語学を習得する」であったのに対して、「中南米・アジアも希望」グループは「異文化を学ぶ」であった¹⁶。また、留学希望国の選定基準では、どのグループも「学べる言語」と「文化の魅力」を重視していたが、「中南米・アジアも希望」グループには「希少価

値がある」ことを重視した人も多かった。

バクナー (1997) も、アメリカからドイツ、およびドイツからアメリカへの交換留学に参加した元交換留学生に調査を実施し、参加理由を分類している。全部で24の参加理由が抽出され、アメリカに留学したドイツ人高校生の留学動機は、答えの多かったものから順に、①より自立するため②文化交流の理解を深めるため③冒険気分で／旅行したかったから④英語の習得または英語力に磨きをかけるため⑤日常生活からの脱却、であったという。反対に、ドイツに交換留学したアメリカ人高校生の留学動機は、①冒険気分で／旅行したかったから②文化交流の理解を深めるため③交換留学生であることの名誉のため④外国語への一般的な関心⑤より自立するため、であった。複数の項目が共通して挙げられているが、順位が異なっていること、また、ドイツへの留学ではドイツ語の習得が目的とされないが、アメリカへの留学では英語習得が意識されていることがわかる。AFS 日本協会 (2002) とバクナー (1997) が共通して示していることは、英語圏への交換留学の動機は英語習得、非英語圏への交換留学の動機は異文化への好奇心というように、英語圏と非英語圏では異なる傾向があるということである。

一方、一ツ橋文芸教育振興会・日本青少年研究所 (2012) の調査結果はこれとは異なる視点を提示している。日本の高校生にある国に留学したいと思う理由を選択肢から選ばせたところ (複数可)、トップ3は、「その国が好き」(64.9%) 「知名度が高い」(32.6%) 「先進国だから」(28.8%) であった。第1位の「その国が好き」は第2位の「知名度が高い」を大きく引き離しており、留学先の選定には「その国が好きかどうか」が大きく影響していると考えられる。ところで、「好きかどうか」を判断するためには、その国のことをある程度知っていなければならない。前節で述べたように、日本の高校生の留学先としてアメリカが多く選ばれるのは、日本の高校生がアメリカについての知識を持っていることを意味しているとも考えられる。つまり、アメリカが留学先として選択される理由には、アメリカなら知っており、しかも良いイメージを持っているからという側面がある。

これに関連した研究として、高校留学ではないが、日本と韓国にある大学・大学院の英語プログラムに注目し、そこに正規留学した東アジア出身者のブッ

シュ・プル要因を明らかにした嶋内 (2014) がある。「プッシュ要因」とは留學生の出身国に関連する変数、「プル要因」とは留學生の受け入れ先国に関連する変数を意味する。嶋内 (2014) は、従来言及されてきたような国家間のプッシュ・プル要因に加え、プッシュ・プル要因が多様化していることを指摘している。その1つは「人とのつながり」、すなわち、過去の短期留学で現地の同世代から受けた刺激や母国における留學生との出会いなどが、留学先国へのプル要因となるケースである。短期留学や留學生との交流を通してその国の人に対して好ましい印象を抱いたことが、日本もしくは韓国の大学・大学院の英語プログラムを選択する背景にある。この指摘は、「その国が好き」であることの背景を説明したものであることができ、留学動機をさらに深く考察した点で重要である。

小柳 (2002) は、留学動機に関する要因は個人の中に複数存在することを指摘している。高校留学への動機は、先行研究が明らかにしてきた要因が相互に関連しあって形成されていると考えられる。先行研究は、「高校生はどのような理由・過程で交換留学参加を決めるのか」という問いについて、まず、英語圏への留学と非英語圏への留学とでは、留学動機に異なる点があることを明らかにした。その上で、英語圏については「英語を身につけたいから」、アメリカへの留学が多いのは「アメリカが好きだから」という理由があることを明らかにしている。しかし、それ以上の考察は高校留学の場合行われておらず、前節で指摘した高校交換留学を促進する上で重要なポイント、「なぜ高校在学中なのか」「なぜ交換留学なのか」についても、先行研究は説明していない。

1.3 本研究の目的と課題

本研究は高校留学、特に交換留学の促進を目的として、高校生が交換留学への参加を決意していくプロセスを明らかにする。先行研究によれば、英語圏に留学する場合と非英語圏に留学する場合ではその動機が異なるため、本研究ではまず、英語圏に留学するケースに絞って検討する。

ここで「英語圏」という語について補足しておきたい。近年ではフィリピンやインドなどが英語圏として留学先に選ばれることもあるが、異文化での地域生活を基本とする高校交換留学では、ホームステイ先で英語以外の言語を使用する

ことも多いため (AFS 日本協会, 2017)、これらの国々と、アメリカやニュージーランドなど留学先として頻繁に選ばれる英語圏の国々は一緒に論じることができないと思われる。そこで、図 1 に挙げたアメリカ、ニュージーランド、カナダ、オーストラリア、イギリスを指す語として「西洋英語圏」を用いる。本研究では西洋英語圏への高校交換留学に着目して、その中でも最も多くの高校生の留学先である、アメリカへの交換留学参加決定プロセスを明らかにする。研究結果は、高校や交流団体、家庭等における留学支援の実践に活用されることを目指す。

2 研究方法

2.1 調査対象者

調査対象者は、高校時代に交流団体 X の交換留学プログラムでアメリカに留学し、調査時に大学生だった 10 人である (表 2)。対象者の募集は以下のように行った。まず交流団体 X からインタビューに協力を得られる人の紹介を受けた。さらに、紹介された対象者に、インタビューに協力を得られる人の紹介を依頼し、対象者を増やした。また、筆者の個人的な知り合いを通して対象者を募った。交流団体 X の交換留学プログラムは、応募、選抜、オリエンテーションを経て各派遣先に渡り、10 ヶ月間現地でホームステイをしながら現地の高校に通うというものである。帰国後は再度オリエンテーションを行う。

表 2 調査対象者一覧

仮名	性別	出身地	留学時学年	大学専攻	調査時学年	高校留学以前の海外滞在経験
くるみ	女	関東	高 3	国際協力	大 4	加 0-3 歳
志乃	女	中部	高 2	外国語	大 4	米 5-7 歳
そのみ	女	関東	高 2	リベラル アーツ	大 4	米 0-2 歳、 豪小 1-4
貴広	男	関東	高 2	法律	大 4	
千夏	女	近畿	高 2	コミュニケーション	大 4	中 2 短期
哲也	男	中部	高 3	経済学、数学	大 2	
亨	男	関東	高 1	映画・メディア 研究	大 3	
仁奈	女	関東	高 3	音楽	大 2	インドネシア 0-5 歳
典子	女	中部	高 2	未定	大 1	中 2 短期
春樹	男	関東	高 2	経済学	大 4	米小 5-6

2.2 調査対象者と調査実施者との関係

調査実施者である筆者は、交流団体 X に 2013 年から調査協力を得ており、本調査以前にパイロット的なグループインタビューや、オリエンテーション・説明会の見学を行った。また、交流団体 X の担当者と定期的に面談を重ね、高校交換留学についての理解を深めた。本調査の対象者には、オリエンテーション・説明会で知り合った 2 人が含まれる。その他の 8 人は筆者と事前の面識はなかった。そのため、事前のメールのやり取りやインタビュー冒頭の時間を使って、信頼関係の構築に努めた。インタビュー終了時には感想や意見を求め、筆者の意図に沿った発言がなされていないかをチェックした。また、録音がよく聞き取れない点や発言の趣旨が不明な点、追加の質問などがあれば、後日対象者にメールで問い合わせた。これらのことから、情動面も含め、率直で詳細なデータを収集することができたと考えている。

2.3 データの収集方法

上記の 10 人それぞれに対して、2013 年秋から 2015 年秋の間に 1 回ずつ、1 対 1 の半構造化インタビューを行った。1 人当たりの平均所要時間は 124 分であった。インタビューの中心は留学中および大学入学後の経験を語ってもらうことであったが、その中で留学の動機や留学先を選択した理由、留学先は希望通りに決まったか、過去の海外滞在経験、留学開始前の外国語力などについても話してもらうよう、適宜質問を加えた。インタビューは許可を得て録音し、逐語録を作成した。

2.4 データの分析方法

分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた。M-GTA は社会的相互作用に関する理論を生み出す質的研究のアプローチであり、M-GTA で最終的に生み出されるのは、「人間集団の行動に関する説明と予測を可能にする理論である」(山崎, 2016)。本研究では「日本からアメリカへの高校交換留学生」が「人間集団」にあたり、彼らがさまざまな社会的相互作用を経てアメリカへの交換留学を決意していくという行動を、インタビューデータに根ざして説明・予測しようとするものであるため、M-GTA が分析方

法として最適であると判断した。また、M-GTA による分析結果は簡潔な図と文章で示される。研究成果を現場で役立ててもらうためには、多忙な教員や交流団体の担当者になるべくシンプルな形で結果を示す必要があると考えたことも、M-GTA を選択した理由である。

M-GTA における理論は、「概念」や「カテゴリー」を相互に関連づけることで構成される。「概念」とは分析結果を構成する最小単位で、データに密着した分析から生み出される。「カテゴリー」とは概念間の関係を一言で表したもので、「概念」よりも抽象的である。分析の手順としては、1) 分析テーマを設定する、2) インタビューデータから説明力のある概念を生成する、3) 各概念間の関係を検討し、必要に応じてカテゴリー化する、4) 概念やカテゴリー間の関係を図とストーリーラインで表す、であるが、実際には1)～4)の間を行きつ戻りつしながら分析を深めていく。本研究の分析テーマは、「高校生がアメリカへの交換留学を決めていくプロセス」とした。分析の過程では、M-GTA 研究会⁷⁾のスーパーバイザーに継続的に意見を求めるとともに、交流団体 X の担当者と定期的な面談を行い、分析結果に対して別の視点を提示してもらった。これらをもとに、多角的、包括的に分析を進めることで、独断的な解釈に陥ることを防いだ。

3 結果と考察

インタビューデータから最終的に 11 概念、4 カテゴリーを生成した。M-GTA ではインタビューデータの解釈が中心になるため、結果と考察を合わせて述べる。以下ではまず、分析結果の全体の流れ (図 2) を、概念 (< >) とカテゴリー (《 》) を用いて説明する。その後、3.1 から 3.4 で各カテゴリー内の概念間関係やカテゴリー間の関係について詳しく述べる。

図 2 を説明する。高校生がアメリカへの交換留学に参加を決めていくプロセスは、《国際的キャリアビジョンからの逆算》や《過去ベースの西洋英語圏志向》が、場合によっては《受験優先規範からの解放》の影響も受けて、《アメリカ高校留学の決意》へと進展する、というものである。《国際的キャリアビジョンからの逆算》のきっかけとなるのは <身近な留学経験者への憧れ> で、高校生は自らも <国際的キャリアに早く踏み出そう> と留学を検討する。国際的キャリ

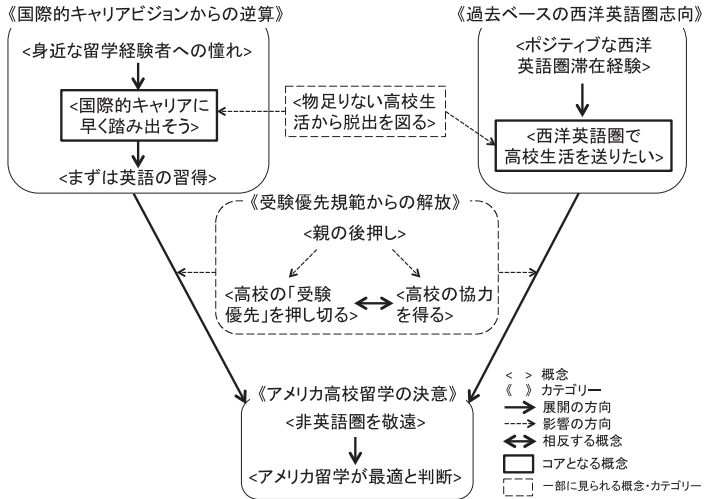


図2 高校生がアメリカへの交換留学を決めていくプロセス

アの第一歩として、彼らは＜まずは英語の習得＞を最優先課題と考える。一方、高校生には《過去ベースの西洋英語圏志向》があり、＜ポジティブな西洋英語圏滞在経験＞をきっかけに、＜西洋英語圏で高校生活を送りたい＞と願っている。これら2つの主な動機に加え、＜物足りない高校生活から脱出を図る＞という動機がある場合もある。これは＜国際的キャリアに早く踏み出そう＞という思いや＜西洋英語圏で高校生活を送りたい＞という思いを強化する。高校生にとって、大学受験は留学を躊躇する理由になることがあるが、＜親の後押し＞によって《受験優先規範からの解放》が促される。＜高校の「受験優先」を押し切る＞場合にはもちろんのこと、＜高校の協力を得る＞ことができる場合でも、＜親の後押し＞は重要である。大学受験への懸念を払拭した高校生は、条件に合わない＜非英語圏を敬遠＞し、英語圏の中でも＜アメリカ留学が最適と判断＞して《アメリカ高校留学の決意》に至る。

3.1 《国際的キャリアビジョンからの逆算》

本研究の調査対象者の発言から明らかになった高校交換留学の動機の1つは、《国際的キャリアビジョンからの逆算》である。その発端となるのは、＜身

近な留学経験者への憧れ>である。これは、国際的に活躍する身近な人に憧れ、その人が留学していたことから、自分も高校留学という選択肢を考え始めることを指す。例えば、哲也（名前は仮名、以下同様）は国連機関で働きたいと考えていた。そのために「大学院あたりでアメリカに行こうかな」（哲也）と考えていたが、ある機会を通して高校交換留学に関心を持つようになった。

高校で進路講演会というものがありまして。（自分と同じ）A高校を卒業されたOBのかたが高校に来てくださって、ご自身のキャリアパスについてお話してくれるっていうものなんですけど。それで、高1のときにきてくださったかたが元外交官のかたで、Bさんっていうかたなんですけれども、そのかたが元交換留学生で。（中略）交換留学の経験についてもBさんがお話してくださって、ああこういう高校時代の経験もありなのかなっていうふうにそのときに漠然と考えるようになりました（哲也）

高校交換留学に漠然とした関心を抱いた高校生は、それを<国際的キャリアに早く踏み出そう>という計画に結びつけていく。すなわち、将来「国際的に活躍する自分」になるためには、英語の習得や国際的な経験が早めに必要だと考え、そのために高校留学を具体的に検討するようになるのである。例えば千夏は、中学2年生のときに、海外大学を卒業したいとこの結婚式がアメリカであり、そこで目撃した国際的な人間関係への憧れから「私も行こう、留学に」（千夏）と考え始めていたが、それは自分のキャリアプランとも合致するアイデアであった。

高校生のときは国連とかにすごい興味があって、「そういうふうなほうの道に進むならC大学」ってどこか伝い、お母さん伝いか聞いて。D高校に入ったのも多分、「C大学の指定校（推薦）がある」というのを聞いていたので、「そういうのもあるんだな」みたいな。（中略）C大学に行くんだしたら、今のままの英語力じゃ無理だって思っていたんで、中学生のときに。高校行って、留学とか1年でも経験しておくといいかなとかも思ったのもあった（千夏）

国際的キャリアビジョンの第1歩として高校交換留学を位置づける高校生が、高校交換留学に求めるものは、英語の習得である。〈まずは英語の習得〉という概念は、将来国際的に通用する自分になるためには高い英語力が必要最低条件であると考え、まずは英語習得を早めにしておこうと計画することを意味する。例えば千夏は、「とにかく要る。そんな細かいアメリカの政治を学ぶとかそんなんじゃないかって、本当に英語をまずできるようにになりたい」と述べている。また、幼い頃は国際弁護士に憧れ、その後も漠然と英語を使った仕事に就きたいと考えていた典子も、「やっぱり英語がまず私は基本だなんて」と、英語の習得を留学の大きな目的と位置づけている。

このように、将来の国際的キャリアビジョンを思い描く高校生は、高校交換留学を通じた早めの英語習得が、希望するキャリアへの第1歩になると判断し、英語圏への高校交換留学を検討する。《国際的キャリアビジョンからの逆算》においては、「早めの」「英語圏への」留学であることが重要視されている。ここでは、交換留学でなければならない理由については特に意識されていない。

3.2 《過去ベースの西洋英語圏志向》・〈物足りない高校生活から脱出を図る〉

一方、アメリカへの高校交換留学のもう1つの大きな動機は、《過去ベースの西洋英語圏志向》である。過去の海外滞在経験、特に〈ポジティブな西洋英語圏滞在経験〉が、アメリカへの高校交換留学を決める背景にあるケースは少なくない。例えば志乃は、留学の動機と、過去のアメリカ滞在時のポジティブな印象について、次のように述べている。

高校でアメリカ行こうって決めたのが、まず、私小っちゃい頃アメリカ住んでて。で、英語もまあまあできたんで、じゃあやっぱりアメリカ行こうって
(志乃)

あんまり記憶ないんですけど、あのオープンな感じとか。ホームパーティーとかいっぱいあるのとか。家族ぐるみで仲いいこととか。人じゃないところで言えば、すごい土地が広くて、そこが日本とは違った魅力ってか・・・特に小っちゃい頃住んでたとこ田舎だったんですよ。なんで、まったくした

感じとか。でも一番は人の良さっていうのに惹かれてました(志乃)

過去の滞在経験へのポジティブな印象は短期滞在のケースにも見られる。千夏は中学2年生時の10日ほどの経験について、「地元のE県の交換留学⁸⁾プログラムに選ばれて行って、そこで初めてホストファミリーの所にステイしてというのがあって。でも英語、全然、分からなかったんですけど、何となくでも頑張っってアメリカの子たちと過ごすというのがすごくいい経験で」と述べている。

このような<ポジティブな西洋英語圏滞在経験>をもとに、高校生は<西洋英語圏で高校生活を送りたい>という具体的な希望を抱くようになる。志乃は次のように述べている。

やっぱり留学する目的としては、本当にアメリカ人になりたいみたいな。その生活に全部馴染んで、言語とか勉強だけじゃなくて、アメリカ人として、友だち作りもそうですし、習慣とか吸収するのをもって思ってたんで(志乃)

志乃が希望していた「アメリカ人として」の生活は、現地の家族の一員としてホームステイする高校交換留学だからこそ可能なものであった。大学生の留学や寮での生活、あるいは有償のホームステイでは、「アメリカ人として」の家庭生活や地域での生活を送りにくい。アメリカへの交換留学を希望する高校生は、どのような留学でもよいわけではなく、現地の高校生同様の高校生活を送りたいのである。

典子は「英語はしゃべりたい、友達を作りたい、もうちょっとアメリカナイズドされたい」と留学の動機を振り返っている。「アメリカナイズドされたい」という動機は、志乃のケースとも共通するものである。ただし、典子が留学以前に滞在したのはオーストラリアであり、アメリカ滞在の経験はない。典子はアメリカに関して、「ハイスクールミュージカルを見たりとか、日本で普通にやってるティピカルな映画を見てた」「最初はやっぱ、ハイスクールミュージカルを夢見て、大きい階段を上るとかそういうこと考えてた」と述べており、マスメディアによる良いイメージからの影響も受けて、アメリカでの高校生活に憧れ、

それを経験したいという希望を抱いていた。現地での直接的な経験だけでなく、このような間接的な経験も留学動機の形成に影響を与えている。

一方、日本での「物足りない高校生活から脱出を図る」ことが「西洋英語圏で高校生活を送りたい」という希望に結びつくケースもある。「物足りない高校生活から脱出を図る」とは、日本での生活に物足りなさを感じていて、他国の様子を知りたい、あるいは単にそこから離れたいために、留学したいと考えることを指す。高校交換留学の動機としてこのような脱出ないし逃避の願望があることは、バクナー(1997)も「逃避指向」として指摘している。バクナー(1997)は、そのような動機について、「交流参加(筆者注：高校交換留学への参加)の経験が成功を導くものであるようには思われない」と否定的に捉えている。しかし、本研究の調査対象者の発言からは、「物足りない高校生活から脱出を図る」ことをきっかけに、「西洋英語圏で高校生活を送りたい」という動機が強化される様子が見えてくる。例えば、小学生時代にオーストラリアに滞在していたそのみは次のように述べている。

やっぱり、(日本の)授業がつまらないっていうのがあるんです。あと、私、日本の英語の教育っていうのもすごく不満だったりとか、あんまり好きじゃなかったっていうのもあるので。他の国はどういうふうに、みんなが授業を進めたりだとか、物事を考えたりだとかしているんだろうっていうふうに思って。そこで、それを見たいなって思ったときに留学をしたいなってさらに強く思ったっていうところですよ(そのみ)

そのみは、「授業は、やっぱり寝てる人だとかも多いじゃないですか。そうすると、あんまり意味というか、なんで学校にそもそも居るのって、そういうふう結構思うところがあって」と疑問を感じていた。オーストラリアでの小学校生活の記憶もあり、もっと別の高校生活があるのではないかと、ぜひもう一度海外で学校生活を送りたいと高校交換留学を希望した。

「物足りない高校生活から脱出を図る」意図は、「国際的キャリアに早く踏み出そう」という動機につながることもある。春樹の留学動機には、以下のような事情があった。

決定的な要因は、高校が実はあんまり1年生の頃おもしろくなくて。F高校なんですけど。僕は中学は公立だったもんですから、結構いろんな社会的階層の子供たちがいて。(中略)どっちかっていうと、中学校の中では、ラフなグループというか不良グループと一緒につるんでたもんですから。(中略)(内部進学クラスのクラスメイトに)温室で育った奴らというふうな、自分の中で彼らにレッテルを貼って、あんまり交わろうともしなかったんで、そういうのもあってあんまり楽しくなかったんですね。それで、そこから飛び出すような気持ちもあって、飛び出したっていうような気持ちもあって、高校留学を選んだんですね(春樹)

現状から飛び出したいという気持ちから高校交換留学へと向かった春樹だが、彼にはアメリカ滞在経験があり、すでに英語をある程度身につけていたという背景もあった。春樹は、留学動機の1つとして、「せっかくつけた英語の能力っていうのをもうちょっと伸ばしたい」と考えたことも挙げている。これは親の勧めでもあり、また当時の春樹は将来防衛や外交関係の仕事に就くことを希望していたため、高い英語力はそのためにも必要だと考えられた。春樹は単に<物足りない高校生活から脱出を図る>ためだけに留学を決意したのではなく、現状から離れ、留学することによって、英語力を向上させ、目指す将来に備えるという積極的な目的を見出していたと考えられる。

そのみや春樹は確かに現状への不満をきっかけに留学を検討し始めていた。しかしそれは、<西洋英語圏で高校生活を送りたい>や<国際的キャリアに早く踏み出そう>という前向きな動機を生むための一要因であって、彼らの留学動機が不満だけで形成されているわけではない。交換留学中にディスカッションベースの授業を受け、強い魅力を感じた亨は、「そういう環境が日本にもあったらアメリカにわざわざ行こうとは思わなかったかもしれない」と述べている。<物足りない高校生活から脱出を図る>は、高校生を海外に「押し出す」ために重要な働きをしているとも考えられ、必ずしも否定的に捉える必要はないといえる。

3.3 《受験優先規範からの解放》

《国際的キャリアビジョンからの逆算》と《過去ベースの西洋英語圏志向》のどちらが中心的な動機であるかは個人によって異なるが、アメリカへの交換留学を決めていく高校生は、多かれ少なかれ両方の動機を持っていると考えられる。

交換留学を実行に移していく過程では《受験優先規範からの解放》が必要になることもある。「受験」とは大学受験のことで、留学よりも大学受験を優先すべきだという高校の方針や、高校生自身が感じている社会的通念から解放されて、初めて高校交換留学を決意できる高校生がいる。

<親の後押し>は、留学を迷いかけたときに、親に背中を押されて留学を決意することである。高校2年生の引退まで部活動を続けたかった仁奈は、「ずっと日本の中にいるっていうのは嫌だな、どっかにいきたいどっかにいきたいってずっと思っていた」が、大学受験のことを考えると「高校2年生で留学しなかったらもう高校留学っていう手はなしだなっていうふうに思っていた」という。しかし、高校2年生のある日、海外の大学に行きたいと冗談半分で母親に言ったところ、高校留学経験者の母親に高校留学を勧められた。

「高3で留学はだめでしょう。まあ許されないんじゃない。」って言ったら「いいじゃない」、「受験はどうするの?」って言ったら「別に留年すればいいじゃない。1年落ちて受験勉強し直せばいいじゃない。ていうか海外の大学に行くんだったら別に関係ないでしょ」。私、部活引退してから留学行くっていう方法があったんだって思って。そこで許されるんだ、少なくとも親からは許されるってそこで突然ふと分かって。じゃあ行きたいってなったんです (仁奈)

仁奈の高校は、帰国子女を多く受け入れている学校だったが、海外への留学生はあまりいなかったという。仁奈は、「学年主任の先生に初めて(留学したいという)その話をした時『あなたふざけてるの? 高校2年生の夏でみんな塾に行き始めてる時に何を考えているの?』」と言われたといい、<高校の「受験優先」を押し切る>必要があった。その際にも、<親の後押し>は大きく、「最後の最

後に『私は知らないから行くなら勝手に行きなさい』って学年主任が母親に言って、それで母親が『いいって言われたから行きます。行きなさい』って言った』という。仁奈にとって母親の後押しは、高校交換留学への参加を決めていく上で非常に大きな要因であった。

一方、千夏の通っていた高校は留学に対して協力的だった。

毎年いるんですよ、D高校から留学行く人けっこういて。(中略) 休学費とかほとんどかからないんです。でやっぱ、留学生の対応に慣れてくれるんで。英語の資料作るとかも、英語科で、勝手にやる先生とか決まってて。だから留学行きたい子がいるみたいなのが担任から伝わって、会議とかに上がると、その英語担当の先生がわーとかすぐ資料集めてやってくれたりとかで。必要な手続きとかはほんとに楽だったんで(千夏)

このような高校に通っている場合には、《受験優先規範からの解放》が比較的スムーズである。ただ、それでも最終的には<親の後押し>が必要な場合もある。千夏は、学校が協力的でも、「留年するというのがあってずっと迷った」と述べ、「親からの後押しがあったんで、『今のうちに行っといたほうがいいんじゃない』みたいなの」と、<親の後押し>が決め手になったとしている。

なお、「受験優先規範」がもともとあまり強くないケースもある。くるみは「部活を最後までやって、高3の6月とかに引退して行こうみたいな。部活をやめたくなかったのが高3で行くことになった結構大きな理由だったと思う。高校卒業が遅れることには躊躇はなくて」と述べ、「受験優先規範」が強かったわけではないとしている。交換留学を検討する高校生の全員に《受験優先規範からの解放》が必要というわけではないが、留学を希望しない理由として「帰国後の学校生活や進路の不安」を挙げた高校生は13.5%おり(文部科学省、2017)、「受験優先規範」は無視できない阻害要因といえる。そのため、この点を概念化およびカテゴリー化し、《受験優先規範からの解放》をプロセス図に含めることにした。

3.4 《アメリカ高校留学の決意》

このようにして、西洋英語圏への交換留学を前向きに検討してきた高校生は、最後に《アメリカ高校留学の決意》をすることになる。交流団体 X の交換留学に出願する高校生は、留学希望先国に順位をつけて提出する。調査対象者の発言からは、ここで<非英語圏を敬遠>する傾向がうかがえる。「アメリカ以外でも行きたいと思っていましたか」という筆者の問いに対して、志乃は「いや、特に。行くとしても英語圏。言語が何も分からない状態の国に行くほどの勇気もなかったの」と答えている。また、典子も「国際系、国際科の子とかはフランス行くとかイタリア行くとっていうふうに言ってたんですけど、私の考えはもう、英語ができないのになぜ他の国の言葉ができるんだってという感覚だったの」と、非英語圏を選択肢に含めていなかった。

留学先は、選考試験の結果の上位から希望が優先されて決定する。希望する、つまり順位をつける留学先の数には制限がないので、順位をつけた国が多いほうが留学できる可能性は高くなる。哲也は、万一英語圏に行けなかった場合のことを考えて、非英語圏にも順位をつけていた。

一応、ヨーロッパ、フランス語も国連公用語の一つで、いずれかは勉強したいなって思ってたので、全くフランス語は勉強してなかったんですけど、とりあえずフランスあたりにも希望を出しました。あとヨーロッパ数国書いて出したと思うんですけど、あんまり行く気があったかどうかっていうと… (哲也)

<非英語圏を敬遠>し、非英語圏は全く希望しない、もしくは下位の希望順で希望するという選択をすることにした高校生は、最後に<アメリカ留学が最適と判断>する。哲也はアメリカを第1希望にした理由を次のように述べている。

英語を当然伸ばしたいというのもあったんですけど、Bさんの(アメリカへの高校交換留学経験についての)話の中で、原爆の話をポンと出したら、すごくホストファミリーに反論された話があって、そういう文化的な違

いとか、そういうのもできれば学んでおきたいなっていうのが、ありました
(哲也)

英語圏への強い希望とアメリカへのポジティブな印象を抱いていた典子が、アメリカを第1希望とすることにした背景には、それらに加えて制度的な理由もあったという。

最初カナダに留学したかったんですけど、交流団体 X の夏期の派遣可能国がカナダのフランス語圏のリージョンだったので、英語は駄目だと思ってフランス語はできませんっていう形で結局変えたんですけど。イギリスも行きたかったんですけど、X はイギリスには留学生出してませんっていうことで諦めて (典子)

今回の調査対象者には、当初はアメリカ以外を希望していたにも関わらず、さまざまな制約からアメリカに留学することになったという人もいる。例えば比較的遅い時期に留学を希望するようになった仁奈は、「ほとんどの交流団体の締切が終わってて、X は一番最初にももちろん見たんですけども。そしたら残ってたのがインドネシアかアメリカで」と述べている。「みんな行くんで」(仁奈) とアメリカはあまり希望していなかった仁奈だが、高校の教員から留学に反対されていたため、「唯一若干サポートしてくれた海外教育の先生が、自分は許可するけれどもアメリカじゃないと許可しないって言われて。そう言われたらアメリカでも行ってみるだけ、行ってみれるもんなら行ってみようと思って」と、アメリカを希望することにした。

このように、アメリカは確かに留学先として人気があるが、高校交換留学の場合、もともとアメリカへの派遣人数枠が大きいために、結果としてアメリカ留学を選択するケースも多々あるといえる。高校生は、将来の希望や派遣状況を考慮し、また応募時期や在籍校の制約などの影響も受けて、最終的に最適な選択として《アメリカ高校留学の決意》をする。

4 総合考察

4.1 理論的示唆

本研究は、高校生がアメリカへの交換留学に参加を決めていくプロセスの解明を課題とした。アメリカへの交換留学経験を持つ大学生10人のインタビューデータをM-GTAで分析した結果、《国際的キャリアビジョンからの逆算》と《過去ベースの西洋英語圏志向》という2つの動機を抽出し、高校生はそれらをもとに《受験優先規範からの解放》の影響も受けて《アメリカ高校留学を決意》する、というプロセスを描き出した。本節では「なぜ高校在学中なのか」「なぜ交換留学なのか」という、高校交換留学促進にあたって重要な2つのポイントを中心に、理論的な示唆を述べる。

「なぜ高校在学中なのか」という疑問に対しては、《国際的キャリアビジョンからの逆算》カテゴリーの中心的な概念である〈国際的キャリアに早く踏み出そう〉が答えになる。ここには、英語習得や国際経験を早め[●]にしておきたいという計画性が強くうかがえ、だからこそ、多くの人が希望する大学在学中ではなく、高校で留学するという選択肢が取られている。英語習得が英語圏への高校交換留学の主な動機であることは、AFS日本協会(2002)などでも言及されており、本研究の調査対象者も先行研究と同様の傾向を示したといえる。しかし、高校留学で英語を身につけたい理由や背景は、これまで明らかでなく、本研究はそれが《国際的キャリアビジョンからの逆算》という計画性に基づくものであることを指摘した。

「なぜ交換留学なのか」という問いについては、《過去ベースの西洋英語圏志向》カテゴリーが答える。高校生の〈西洋英語圏で高校生活を送りたい〉という希望の背景には、〈ポジティブな西洋英語圏滞在経験〉があった。彼らの〈ポジティブな西洋英語圏滞在経験〉は、長期滞在の場合は現地の一員として生活した経験であり、短期留学の場合は現地の同世代と交流した経験である。彼らはそのような経験に基づいて、同じような生活をもう一度したいと考える。すなわち、彼らの留学の目的は現地で「高校生活を送る」ことであり、それは「海外で地域生活を体験^⑨し、異文化に対する理解を深めること」という交換留学の目的と合致しているのである。

過去の海外経験が留学のきっかけになりやすいことについては、AFS日本

協会(2002)が、調査対象者448人のうち、高校交換留学以前に海外経験(旅行を含む)のあった者が297人(66%)だったとしており、そこに何らかの関係性があることを示唆している。しかし、なぜ過去の滞在経験が留学動機とつながるのかという点にまでは踏み込んでいない。その点について、嶋内(2014)は、日韓の高等教育機関の英語プログラムに留学した大学生・大学院生の場合、過去の滞在経験や留学生との交流経験によって得た「人とのつながり」が留学先国へのプル要因となっているとして、過去の海外経験が留学動機に結びつく理由を示している。本研究の対象者にも、「アメリカ人として」生活したかった志乃に代表されるように、過去の海外経験時の「人とのつながり」が<西洋英語圏で高校生活を送りたい>という希望につながっているケースが複数確認できた。嶋内(2014)の「人とのつながり」は、アメリカへの高校交換留学の場合にも有効な説明であるといえる。

ところで、<ポジティブな西洋英語圏滞在経験>から<西洋英語圏で高校生活を送りたい>へという展開については、過去にアメリカに滞在し、アメリカに留学を希望する、という典型的なケース以外に、さまざまなパリエーションが存在する。アメリカへの交換留学参加決定プロセスをより多面的に理解するために、それらについても検討する。第1に、過去の滞在国はアメリカ以外の西洋英語圏だが、留学先としてはアメリカを希望するケースがある。例えば典子にはオーストラリアへの短期留学経験が、そのみにはオーストラリアでの長期滞在経験があったが、2人とも最終的にアメリカ留学を選んでいる。理由としては、留学時期や出願時期といった制度面での制約が挙げられ、過去に得た「人とのつながり」が留学先選択において常に優先されるわけではないことがわかる。

第2に、<ポジティブな西洋英語圏滞在経験>がなく、<西洋英語圏で高校生活を送りたい>と考えるケースがある。この場合には、間接的な経験が<ポジティブな西洋英語圏滞在経験>の役割を果たしていると考えられる。例えば、哲也は進路講演会でアメリカへの元交換留学生の話聞いていたし、亨も在籍高校には留学する生徒が比較的多かったため、上級生などの留学経験談を聞いていたと考えられる。このようなケースには、間接的な「人とのつながり」があるといえるだろう。

第3に、過去に西洋英語圏ではない国に滞在し、アメリカに留学するケースがある。海外滞在経験があるのであれば、「人とのつながり」のある国、すなわち過去の滞在国への留学を希望するはずだが、実際にはそうではないことが多い。インドネシアで幼児期を過ごした仁奈は、「もともとインドネシアで育ったっていうのもあって、貧しい国の人たちを助けたいっていうふうには思ってたんです。ちっちゃいころから」と述べ、そうした思いが留学の背景にあったとしている。しかし、留学を検討し始めた時期が遅かったために、「(留学可能な国として)残ってたのがインドネシアかアメリカで。それも運命かなと思ったんですけど。インドネシアか。」と語り、必ずしもインドネシアを留学先として希望していたわけではなかった。同様の傾向は、AFS日本協会(2002)も報告しており、具体的な人数は明らかでないものの、「アメリカと欧州滞在経験者はほとんどが自分の滞在国を希望しているが、中南米、アジア滞在経験者は1人を除いて全員がアメリカを希望している」としている^[10]。本研究では、西洋英語圏以外に滞在していた調査対象者は仁奈のみだったため、このようなケースを概念化することはできなかった。しかし、西洋英語圏以外に滞在する小中学生は増加しており(外務省, 2017)、それらの国から帰国した生徒が高校留学を希望するケースは今後増えると思われる。仁奈の例および先行研究から、西洋英語圏以外の滞在経験者がアメリカへの交換留学を決めていくプロセスには、西洋英語圏滞在経験者の場合と異なる概念が含まれることが示唆された。この点は次の研究課題となる。

4.2 実践的示唆

最後に、本研究の結果をもとに、高校交換留学を促進する方法を検討する。《国際的キャリアビジョンからの逆算》のきっかけになっていたのは<身近な留学経験者への憧れ>であった。ごく身近に留学経験者がいなくても、高校の講演会などを通して、留学経験者と知り合うことができる。それが、高校生の抱く国際的キャリアビジョンを体現しているような交換留学経験者であれば、高校交換留学への関心はさらに高まると考えられる。

《過去ベースの西洋英語圏志向》については、特に中学生時代の短期留学など、高校以前の海外経験の充実を期待したい。そこには、国内で海外に関する

経験をし、直接的または間接的に「人とのつながり」を得ることも含まれる。なお、高校交換留学本来の目的に照らし合わせれば、海外経験の充実を西洋英語圏に限定する必要は全くない。近年、西洋英語圏への私費留学が他国からも増加しているため、交換留学のためのホームステイ先の確保が困難になっている現状もあり、交換留学の促進にあたっては、西洋英語圏以外への留学拡大も検討すべきであろう。そのためにも、西洋英語圏に偏らずに、さまざまな国について知ることや「人とのつながり」を得ることは重要である。

《受験優先規範からの解放》が高校交換留学への参加決定プロセスに影響を与えているという点は、高校生の交換留学参加決定プロセスが決して高校生だけのものではないことを意味している。高校生は高校の教員や保護者、大学関係者など、周囲の大人たちの影響を強く受けながら留学を決定している。大学入試の多様化や海外進学が増加などもあり、高校留学を大学受験への障害とする捉え方は以前ほど支配的でないと考えられるが、進学実績を重視する一部の高校では高校留学に積極的でないところもあり、状況の改善に取り組む必要がある。

《アメリカ高校留学の決意》で見られたさまざまな制約、特に応募時期や派遣人数といった制度的制約は、確かに高校生の選択肢を狭めるが、交換留学においてそれは必ずしも排除されるべきものとはいえ、制度的制約の存在も高校交換留学を決めていくプロセスの1要素と考えることもできる。一般に、留学を計画する際には「なぜその国に留学するのか」を強く意識するように求められる（例えば日米教育委員会，2015）。しかし、交換留学の趣旨は「お互いが異なる文化的背景を持つ者として理解しあおうと努力する」（全国高校生留学・交流団体連絡協議会，2011）ことであり、どの国に留学しても異文化で密度の濃い現地生活を体験することになる。留学先に関しては、具体的な理由よりも柔軟性を求めたい。

5 今後の課題

本研究は、高校生がアメリカへの交換留学を決めていくプロセスを明らかにし、高校交換留学の動機研究に理論的および実践的示唆を与えたが、課題も浮き彫りとなった。特に、既に述べたように、過去に西洋英語圏での滞在経験が

ある場合と西洋英語圏以外での滞在経験がある場合では、高校交換留学参加決定プロセスに異なる点があることがわかった。西洋英語圏以外での滞在経験がある場合については本研究で検討できなかったため、新たに研究を実施する必要がある。それによって、海外経験と留学動機との関係は一層多面的に明らかにされると考えられる。また、今後の高校交換留学の促進にあたっては、西洋英語圏以外の国への留学をますます充実させる必要がある。西洋英語圏以外の国に留学したケースについても、なぜ、どのように参加を決めたのか、本研究と同様の検討を加える必要がある。

本研究の調査対象者は、高校交換留学から帰国し、大学受験を経て、充実した大学生活を送っていた。国内の大学から再度留学したり、海外の大学に進学したりした者は、大学での留学と高校交換留学を比較し、高校交換留学がいかにユニークな経験であったかをインタビューで語った。留学プログラムにはそれぞれ目的がある。留学促進にあたっては、それぞれの特徴を十分に踏まえた上で、高校生の留学への決意を支援したい。

謝辞

調査に協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。また、M-GTAについてご指導いただきました山崎浩司先生（信州大学）に深く感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費14J07255の助成を受けました。

注

- [1] 「留学」（3ヶ月以上）と「外国への研修旅行」（3ヶ月未満）の合計と考えられる。
- [2] 「もし可能なら、外国へ留学したいか」という問いに対して、「高校在学中に留学したい」「高校を卒業したら、すぐ留学したい」「大学期間中、留学したい」「大学卒業後、留学したい」「留学したいと思わない」から選択。
- [3] 一般的に「交換留学」と呼ばれていてもこの定義に当てはまらない場合は除く（姉妹校留学など）。それらの留学で体験する内容は、ここでいう交換留学での体験内容と異なる点があると考えられるからである。主な交流団体には、AFS日本協会、YFU日本国際交流財団、日本国際生活体験協会（EIL）などがある。
- [4] AFS日本協会、日本国際生活体験協会（EIL）などの沿革を参照。
- [5] 当時の名称はエイ・エフ・エス日本協会だが、2011年にAFS日本協会に名称を変更。本稿ではAFS日本協会に統一して表記する。
- [6] 「英語圏のみ希望」「中南米・アジアも希望」の第1位は第2位との差が大きく、はっきりとした傾向を示している。一方、「欧州のみ、および欧州と英語圏を希望」グルー

- プでは「異文化を学ぶ」が第1位だったが、第2位および第3位との差はわずかで、傾向があまりはつきりしない。
- [7] M-GTAを用いて研究する人々の会。http://m-gta.jp
- [8] 本研究が対象とする「交換留学」とは異なる。
- [9] 「体験」と「経験」について、本稿では「経験」を用いるが文献について述べる場合は原文を優先する。
- [10] ただし、仁奈はアメリカを積極的に希望していたわけではなく、この指摘とも異なっている。

参考文献

- AFS 日本協会「高校生留学の促進に関する調査」2002年 <http://www.afs.or.jp/documents/site_51/category_254/promote.pdf> (2016年7月18日閲覧)。
- AFS 日本協会『AFS年間派遣プログラム 2018年派遣 プログラム案内』AFS 日本協会、2017年。
- 外務省『海外在留邦人数調査統計 平成29年要約版』2017年 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000260884.pdf> (2017年7月22日閲覧)。
- 金子 元久「周縁の大学とその未来—高等教育のグローバル化—」『教育社会学研究』第66集、2000年、pp. 41-56。
- 小柳 志津「留学大衆化のなかの在豪日本人留学生：留学動機と成果を中心に」『留學生教育』第7号、2002年、pp. 27-38。
- 嶋内 佐絵「何故、英語プログラムに留学するのか? : 日韓高等教育留学におけるプッシュ・プル要因の質的分析を通して」『教育社会学研究』第94集、2014年、pp. 303-324。
- 下川 泉「求められる高校生留学プログラムの意義と在り方」『留学交流』2005年12月号、pp. 14-17。
- 全国高校生留学・交流団体連絡協議会『高校生交換留学プログラム要覧2011：異文化体験学習』全国高校生留学・交流団体連絡協議会事務局、2011年。
- 日米教育委員会『アメリカ留学公式ガイドブック』アルク、2015年。
- 法澤 剛一「日本における高校生留学政策の展開と今後の課題：日本からの留学生派遣を中心として」『教育学論集』（筑波大学）第1号、pp. 107-127、2005年。
- バクナー、J. デビッド「教育の国際交流における動機的要因—日米に関する動向と調査—」『留学交流』1997年8月号、pp. 6-9。
- 一ツ橋文芸教育振興会・日本青少年研究所『高校生の生活意識と留学に関する調査報告書：日本・米国・中国・韓国の比較』日本青少年研究所、2012年。
- 文部科学省「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム【高校生コース】」2014年 <http://www.tobitate.mext.go.jp/hs/> (2016年10月3日閲覧)。
- 文部科学省「平成27年度高等学校等における国際交流等の状況について」2017年 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/06/1386749_27-2.pdf> (2017年7月22日閲覧)。
- 山崎 浩司「M-GTAの考え方と実際」諸富祥彦・末武康弘・得丸智子(さと子)・村里忠之(編著)『主観性を科学化する』質的研究法入門 金子書房、2016年、pp. 57-69。

{受付日 2017. 7. 27}
{採録日 2017.11.13}